雲南病院だより

お医者さんでも、迷っています
～医療現場における不確実性～

地域ケア科　診療科部長　笠（りゅう）　芳紀（よしのり）

皆さんは、自身や家族の体調が悪くなり病院にかかるとき、「お医者さんならすぐに病名が分かって、一番いい方法で治療してくれるはず」と期待されているのではないでしょうか。

しかし、実は医療の世界には、どうしても「確実ではないこと（＝不確実性）」が常に存在しています。私たち医師は、この「不確実性」と日々向き合いながら、皆さんの健康な生活を支えるため、最善を尽くしています。

「不確実性」には、診断や治療そのものの難しさ（技術的な不確実性）のほかにも、人生の終え方のように「正解」がない問題、さまざまな専門スタッフと協力する中での意見の相違など、いろいろな形があります。

今回はその中でも、皆さんの診察に最も関わりの深い「技術的な不確実性」についてお話しします。

医師の頭の中は、まるで漫才？

皆さんは、医師が「その症状は、○○病ですね」、「この検査結果なので、△△症候群です」というように、スパッと診断を下しているイメージをお持ちではないでしょうか。

しかし実際は、全く違います。「こんな症状が出ているけど、この病気だろうか」、「もしこの病気なら、あの症状もあるはずだけど…。もう少し詳しく聞いて、検査もしてみよう」というように、さまざまな可能性を考え、時には迷いながら診療を進めているのが実情です。

その様子は、さながらミルクボーイの漫才のようです。

「これは肺炎やなぁ」

「でも、せきや痰などの症状はありませんよ」

「じゃ、肺炎と違うかぁ」

「でも、レントゲン写真には肺に影が…」

「やっぱ肺炎やないかい」

「でも…」

このように、頭の中で自問自答を繰り返しながら、診断に近付こうとしているのです。

なぜ「確実」ではないのか？

この「診断や治療の難しさ」には、いくつか理由があります。

言葉の壁 ― 症状の伝わりにくさ

患者さんからお話を聞くことは、診療で最も重要なことの一つです。しかし、患者さんが伝える症状の表現を、私たちが正しく受け取れていない可能性は常にあります。

私が雲南市に来て、今でも完全に理解するのが難しいと感じる言葉に**「せつい」**があります。救急外来でこの言葉を聞くと、息苦しいのか、胸が締め付けられる感じなのか、痛みなのか違和感なのか、いろいろな聞き方で確かめようとしますが、なかなかうまくいきません。患者さんは「とにかく、せつい」とおっしゃり、どう解釈すればいいか、頭を悩ませることもあります。

皆さんが当たり前に使っている言葉の細かなニュアンスを、医師がうまく汲み取れないと、正しい診断に結び付かないかもしれません。

また、患者さんが「これは大したことないだろう」と思って話さなかったことの中に、診断の重要な手掛かりが隠れていることもあります。逆に、本人が重要だと思っていた情報が、かえって診断を複雑にしてしまうケースも少なくありません。

万能な検査や治療はない ― 検査と治療の限界

どんなに優れた検査でも、病気のすべてが分かるわけではありません。また、お薬などの治療も、すべての人に同じように効くとは限りません。

インフルエンザが流行する時期に、検査では「陰性」だったのに、「インフルエンザの可能性はあります」と言われた経験はありませんか。インフルエンザの迅速検査は、実際に感染している10人を検査しても、陽性になるのは6人から8人程度です。つまり、**感染していても10人のうち2人から4人までは「陰性」と出てしまう**のです。

そのため、家族がインフルエンザにかかった後に自身も発熱した、といった状況では、「検査が陰性でもインフルエンザの可能性が高いので、お薬で治療を始めませんか」と提案することがあります。それでも、「学校や職場に証明書を出さないと」、「はっきり診断してほしい」などの理由で検査を行い、結果が陰性だと、私たちも「さて、どう説明し、どう治療しようか…」と再び頭を悩ませることになります。

病気によっては確立された治療法もありますが、効果には個人差があり、最終的には**「やってみなければ分からない」**というのが実情です。治療の経過が想定と大きく異なる場合は、診断そのものを見直すこともあります。

皆さんと共に、病気と向き合うために

市民の皆さんから見ると「万能」に思えるかもしれない医師も、日々こうした「不確実性」の中で、手探りで診療を行っています。

この不確実性を完全になくすことはできません。だからこそ私たちは、患者さんのお話に真摯に耳を傾け、丁寧に診察し、看護師や他の専門スタッフと協力することで、思い込みや見落としを防ぎ、皆さん一人ひとりにとって最善の医療は何かを常に考えています。

病気と向き合うためには、私たち医療者と、患者さんや家族との対話と協力が何よりも大切です。これからも、皆さんと一緒に考え、歩んでいきたいと思っています。

ACPを一緒にはじめてみませんか

緩和ケア認定看護師　深田（ふかだ）　知華（ちか）

ACPとは

「人生会議」や「ACP（Advance Care Planning）：以下、ACP）」という言葉を聞いたことがありますか。

日本医師会では以下のように定義されています。ACPとは、将来の変化に備え、将来の医療およびケアについて、本人を主体に、その家族や近しい人、医療・ケアチームが、繰り返し話し合いを行い、本人による意思決定を支援する取り組みのことです。

大切なことなので、いずれは考えなければいけないと感じた方もいるのではないでしょうか。反対に、元気なうちは考えられないと感じた方もおられると思います。

いきなり「延命治療をする、しない」、「口から食べられなくなったらどうする」というような内容から考えると行き詰まってしまうかもしれません。

まずは、自分や大切な方が生まれてから、今日に至るまでの歴史（思い出や出来事）を振り返ったり、大切にしてきたことなどを思い浮かべてみてはどうでしょう。ACPを考える時に、とても大事なポイントになります。

大切な人と共有しましょう

もしものときについて話し合ったり、自分の気持ちがある方は、ぜひ大切な人に伝えたり、共有しましょう。

家族、友人、かかりつけ医など、信頼できる方などに伝えたり、書面に書き残しておきましょう。

誰でも、いつでも、命に関わる大きな病気やケガをする可能性があります。命の危機が迫った状態になると、約70%の方が医療やケアなどを自分で決めたり、望みを人に伝えたりできなくなると言われています。

繰り返し

考えて、話し合って、悩んだりしながら出した気持ちでも、時間の経過や、周りの環境、状況などで変わることもあると思います。

人の気持ちは変わったり、揺らいだりするものです。だからこそ、繰り返し考えたり、話し合いましょう。そして、大切な人に伝えたり、共有したり、書き残した書面に書き加えたりする作業を繰り返すことがACPの大事なポイントです。

どうやってはじめたらよいのか迷ったら

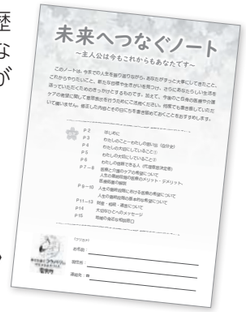
自分のもしもの時について考えてみたいけど、どうしたらいいか分からないと思われた方もあると思います。

雲南市では、「未来へつなぐノート」というノートが作成されました。こちらは市役所ホームページからダウンロードできます。

医療・ケアに関すること、自分の歴史に関すること、相続に関することなど多面的に考えたり、書き残すことができる内容になっています。

住み慣れた地域で、自分らしく、できるだけ後悔なく生きるためにACPをはじめてみませんか。

〈市ホームページ〉



中学生が「一日看護体験」を実施しました！

８月21日（木）に、中学生を対象に一日看護体験を開催し、今回は２人の中学生が参加しました。

まず病院の概要、資格の取得方法を説明した後、各病棟に分かれて看護体験を行いました。患者さんを乗せて実際に車いすを操作したり、血圧測定体験なども行い、参加した生徒たちは「普段はできない看護体験をすることができて、とても勉強になった」、「看護師さんが患者さん一人ひとりに丁寧に接していて、すごいと思った」など、貴重な体験に目を輝かせていました。

この体験を通じて、看護の仕事への関心が高まり、「将来は人の役に立つ仕事に就きたい」と話す生徒もいました。

今後も、こどもたちがさまざまな職業を知り、進路について考える機会を提供していきます。

体験の様子▶

市内各地に「ブルーサークル」が登場！

世界糖尿病デー ～Unite For Diabetes～ 11.14

11月14日の「世界糖尿病デー」をご存じですか？この日は、世界保健機関（WHO）が「世界糖尿病デー」に指定し、各地で啓発活動が行われています。シンボルマークは、「ブルーサークル」です。国際連合やどこまでも続く空を表す「ブルー」と団結を表す「輪」で、「糖尿病との闘いのため団結せよ」の意味が込められています。雲南市立病院では、例年11月中は、「ブルーサークル」を掲げ、啓発活動を行っています。昨年は、近隣の調剤薬局も「ブルーサークル」を掲げることで、一致団結して糖尿病治療に関わっていくことを示しました。今年は病院、薬局だけでなく雲南圏域のさまざまな医療機関に声掛けをして活動の輪を広げたいと考えています。

糖尿病治療は、本人だけで戦うのには限界があります。家族はもちろん、医療・介護に携わる方々と一緒になって闘うことがポイントとなります。みんなで団結して、糖尿病に立ち向かいましょう。

さくら薬局

おおぎ薬局

雲南市立病院

かけや薬局

大東駅前薬局

フォーカス FOCUS

病院では毎年さまざまな職種のスタッフが入職し、働いています。
これからたくさんの知識と経験を積み、雲南市立病院というステージで患者さんのために活躍していく新入職員にフォーカスし、それぞれの担当業務や仕事への思いなどを紹介します。

新入職員紹介

経営課　医事係

岩間（いわま）　大（だい）

「病院の縁の下の力持ちになるために」

事務員をめざしたきっかけは？

私が病院の事務員をめざした理由は、医療関係の仕事をしている親族が多く居たため、幼い頃から医療に関心があり貢献できたら良いなと思っていたからです。また、文系の自分が最大限医療に貢献するには病院の事務職が最適だと考えたからです。

雲南市立病院の魅力はなんだと思いますか？

５階のレストランで出てくる食事が美味しいことです。

売店でもレストランで作られた弁当が売られているのがとてもありがたいです。

それと、５階からの景色はすごく良いです。景色を見ながらゆっくりするだけでも疲れが少しだけ和らぎます。

仕事には慣れましたか？

日常業務は少し慣れてきましたが、患者さんなど院外の方と話す時は少し緊張します。医事室で働く以上院外の方とのコミュニケーションをとる機会は必然的に多くなるので、これからまだまだ勉強の毎日です。先輩方の背中を追って頑張ります。

業務の様子

職場の雰囲気はどうですか？

職場の雰囲気はすごく良いです。上司や同期もすごく優しい方ばかりなので、働きやすいです。

とても話しやすく、分からないことがあった時に気軽に相談できる環境なので、安心して業務に励むことができます。また、同じ趣味の方も多く居るのでお話しするだけでもとても楽しい時間が過ごせます。

仕事をするうえで嬉しかったことはありますか？

問診でタブレット端末の操作が分からない方のお手伝いをした際にお礼の言葉をかけていただいた時です。心がとても温かくなりますし、業務をする上でとても励まされます。本当にありがとうございます。

今後の目標を教えてください

私の目標は診療情報管理士という資格を取り病院業務に貢献し、先輩や上司からの温かい指導の下で、雲南市立病院の未来を支えていけるような立派な病院職員になりたいと考えています。

私のとある一日

８：３０	業務開始 医療費入金処理
１０：００	カルテの点検
１２：００	休憩
１３：００	業務再開 報告書類の作成
１５：００	各種協議
１６：００	会議資料作成
１７：１５	業務終了